
童話 騎士と魔物と姫と

流葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話 騎士と魔物と姫と

【Nコード】

N3072G

【作者名】

流葉

【あらすじ】

老人が語る物語の本当の形とその意味とはそして物語の解き役となる、どこかやる気の無い主人公レイグルが、いざという時に見せる男らしい姿。レイグルと一緒に深く話に関わる一国のお姫様アリーナの可愛らしさが場を盛り上げます。二人の関係の進展や周りに居る多くの存在が、一つの物語を作る。これは様々な物語が絡み合うある異世界の物語。

一章 物語（前書き）

基本は恋愛ですので、バトルはあまり無いと思います
恋愛といっても不適切な表現や描写は一切ありませんので御安心下
さい。

一章 物語

「昔昔ある所にとても愛くるしいお姫様がおりました。お姫様は誰からも愛される存在で、気品と美貌の持ち主でしたが、人間嫌いという変わったお方でもありました。そんなある日お姫様は気分転換でもしようと幾人かの者を引き連れて、森へとやってきました。その森は古来より魔物などが住む土地とされ、人があまり立ち入らない場所です。人間嫌いのお姫様にはこれ以上居心地の良い場所はありませんでした。お姫様と一緒に森へやってきた者達は恐ろしくて堪りませんでした。お姫様の落ち着いた様子に心を癒されてもおりました」

数十人の子供達の前でしわくちやの口を動かすのは一人の老人。名をナロクと言うその老人はまたゆっくりとしたペースで話を続ける。「気疲れしていたのでしょうか、お姫様と共に森へとやってきた者達は一人また一人と寝入ってしまった。お姫様はそれを見てもう少し奥に行ってもばれないだろうと思いました。

森の奥は暗く、時たま何かが動くような音がしますが、お姫様は少しも怖くはなくどんどん奥深く入っていきます、ふと後ろを見ると自分がどうやって此処まで来たのか分からない程に来てしまっています。戻ろうにも方向が分からず、心細くなってしまったお姫様は声を上げて泣いてしまいました」

「お姫様可哀想」

子供達が自分のことのように声を上げる。それをナロクは優しげな瞳で見つめている

「どうしたのですか？若い男の声がお姫様の耳に届きました、心配して誰かが助けに来たのかと顔を上げると奇妙な仮面をつけた男が立って居ます。不思議と不気味ではなく、むしろ優しげな雰囲気。男が持っているからか、先ほどまでの心細さが嘘のように無くなっています」

「お姫様良かったね」

「うん」

安心したようにはしゃぐ子供達にナロクは微笑む。

「実は迷子になってしまつて・・・。お姫様が此処までやってきた理由を話すと、男は安心させるように頭を撫で、付いておいでと声をかけました。お姫様が男に付いて行くと、しばらくしてだんだんと暖かな日差しが見えてきました。ようやく森から抜け出すとお姫様の住むお城が見えました。ありがとう助かりましたお名前を教えてくださいませんか？すると男は困った様に微笑んで、魔物に名前はないのだと答えました」

「魔物つてなあに？」

子供達の中には魔物を知らない子も居るようで、近くの子に聞いている。教えられると泣きそうな表情になるのは、この国では魔物人がを襲うだけの化け物という考えが定着しているからだろう

「お姫様は自分は人間が嫌いだが、魔物は嫌いではないと言うと。魔物の男は驚いているようだった。そうしてお姫様と魔物の奇妙な日々が始まったのだった。二人は時間の空く時は何時でも会い語らった、それは当然許されぬ事だったが二人にとって何よりも大切な事だったのだ」

「ある日二人が一緒にいるところを兵士が目にしてしまつ、王は怒りその男を捕らえ二度と森から出ぬように、森の奥深くへと男を縄で縛り置き去りにした。男はお姫様が最後まで助けに来てくれると信じていたが、結局お姫様は来る事が無かつた」

「どうしてお姫様来ないんだろう？」

魔物への同情の声がナロクへと降り注ぐが、それを流して老人は結末を語りだす

「数日後、魔物の男は苦労のすえ縄を解き、きつと一人では助けに来られなかつただけだろうと、お姫様の居る城へと向かつた。王に見つからぬようにフードを被つた男が城で目にしたのは、お姫様と遠くの国の王子の結婚式だった。あまりの怒りと喪失感に男は仮面

を取り、その醜い顔を憤怒に染めて誓いの言葉をお姫様が言うとき
言い放った。俺はこの国を王を人間を姫を恨み続けてやる！と・・・
」

固唾を飲む子供達、異様に静まり返った中でナロクは悲しそうに話す
「その後お姫様は前以上に人間嫌いになり、ようやく王子との間に
出来た子供も抱き上げる事すらしなかった。そう魔物はお姫様の心
を完全に壊してしまったのだ、自分の心と同様に粉々になるまで・
・・・」

「終わり？」

「ああそうだよ」

ナロクは子供達の続きを懇願する眼差しを見返し、一回手を叩くと
物語の終わりを告げた、その様子を最後まで見ていた俺は声をかける

「ナロクじいさん、何でよりによってその話なんかしたんだよ？」

「おおレイグルか、何時からそこに居った？」

「あんたが辛気臭い話しを始めた頃からだよ、たく子供の夢壊
すようなこととして楽しいのかよ？」

ナロクは俺を意味深な目で見ると、頭を掻いて遠くで子供達が深く
考えている様子を見る

「この物語はな、人考えさせられる本当に特別なお話なのじゃ
よ。レイグルお主もこの話の後、頭を抱えて考えておったな。何故
幸せな形で終わらないのかと、続きがあるのではないかと・・・」
「まあな」

今となつてはたかが物語に何でそこまで考えさせられたのか分から
ないが、子供の時一番深く考えたのがあの時だったのかもしれない
と思う

「わしはな子供達にこの物語を幸せな形に直して欲しいのかもしれ
ん、お主がこの物語の続きを書いてきたときのような形で」

「あれはただの出来心でやった事だろ、いちいち人の恥ずかしい過
去を掘り返すなよ！」

恥ずかしい過去を思い出し、自分でも羞恥から顔が赤くなっている

ことが分かる

「そうじゃな、ところで急がんでいいのか？またアリーナ様に怒られるぞ？」

「あつやべー！じゃあなナロクじいさん」

「うむ、またな」

ナロクを残し俺は城へと急ぐ、魔物のように恨みの言葉を言いに行くのではなく、我らが姫様のご機嫌取りの為にだ

一章 物語（後書き）

感想などはどんな意見でも参考や励みとなりますので、感想をお待ちしています。

こういうジャンルの小説を書いて欲しいなどの要望がありましたら、ぜひお伝え下さい。

拙い文章だったと思いますが、読んでいただいて感謝の気持ちでいっぱいです。機会がありましたらぜひ続きも読んでくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072g/>

童話 騎士と魔物と姫と

2010年10月20日12時54分発行